

『ヴィルトゥオーゾ』 - 藍川 滯

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

冷たい北風が吹いて、ゆらりと木の枝が揺れた。折れて落ちる心配はないが、夕方に屋外にいるのは体が冷える。僕は慎重に上着を羽織り、体制をゆっくりと立て直した。木の枝の上はただでさえ不安定だ。あまり大きな動きをすると平衡を保てなくなり、落ちてしまう。この部屋を木の上から覗いているなどとマスターに気付かれれば、何をされるか予想すらつかない。

僕が見つめる先にあるのは、小さな部屋。蜂蜜のような冬の西日に照らし出された室内では、彼女が部屋の中央に置かれたピアノの前に座り、豊かな和音を奏でていた。その隣の肘掛椅子にはマスターが座り、彼女の音色に酔いしれるように目を閉じて聞き入っていた。

彼女の奏でる音楽は、教会のステンドグラスのように色鮮やかだ。僕にピアノの音色の良さあしは分からないけれど、彼女のピアノの腕前が相当のものであることは、素人でもすぐ分かる。常人には考えもつかないような音の並びを難なくこなしていくのには、きっと途方もない努力と才能が必要なのだろう。

初めて彼女を見た時から、僕は彼女に恋をしていた。長く艶やかなセピア色の髪、陶器人形(ビスクドール)のように愛らしく無垢な面立ち。衣装は彼女の容姿に相応しい、細部まで隙のない豪華なドレス。遠目であっても、その完璧な美しさは僕の心を惹きつけてやまなかった。

ここで僕が庭師としての仕事をもらった時から、彼女はこの部屋にいた。彼女がこの部屋からいなくなっているのを、見たことがなかった。僕は自分の仕事の合間に彼女の部屋を何度もこっそり覗いていたが、彼女が部屋からいなくなっていることは一度たりともなかった。そもそも、ピアノの前から動いていることすらなかった。

部屋から漏れ聞こえてくるピアノの音色は非常に技巧的で、どこか人間を超越したものにさえ感じられる。部屋から出ずにひたすらピアノを弾き続ける彼女の姿に、僕はいつしか心を惹かれ、彼女と思いを合わせたいと思うようになっていた。

外から見ただけでは、彼女の姿とピアノの音色しか分からない。どんな声をしているのだろう。どんな風に物事を考え、世界をどのように感じるのだろう。何を思ってピアノを弾き、その音色に何を乗せようとしているのだろう。

僕はここに来るまで、彼女のような美しく高貴な容姿の少女を見たことがなかった。僕が生まれ育ったのは、ここから少し離れた小さな村だが、僕が幼い時に流行った疫病で、ほとんどの人間が死に絶えてしまった。命からがら村から逃げ出した僕は、この屋敷の前で行き倒れたところをマスターに拾われた。

マスターは住まいと食事を保証する代わりに、庭師として働くことを提案して、僕はその提案に飛びついた。生きられるなら、庭師でも何でもやってやる、と思った。実際、思った以上に待遇が良く、僕はこの屋敷に来たことを後悔しなかったし、自分の幸運に感謝していた。

ただ、一つだけ不可解なことがあるといったら、屋敷に来たばかりの時にマスターに南西の棟には近づかないように、と釘を刺されたことだった。理由も話してくれず、不思議に思いながらも一応言いつけは守っていた。でもある日、僕は背の高い庭木の手入れをしていた時に偶然、南西の棟の二階にいる彼女のピアノを弾く姿を見てしまったのだ。その姿を一目見ただけで、僕は彼女に心を奪われてしまった。

彼女への想いを自覚すると同時に、マスターの言いつけが僕には疑わしいものにならなくなった。彼女のいるところに近づくな、ということは、マスターは僕が彼女と接触することを好ましく思っていない。彼女が部屋から出る様子もないし、彼女はほぼマスターと、雑務のほとんどをこなす寡黙な執事としか会わないということになる。

なぜマスターは、彼女を部屋の外へ出そうとしないのか。外の広い世界から彼女を遠ざけ、この小部屋に監禁している理由は想像もできない。しかし、彼女が人目に触

れることを極端に避けていることは分かる。

僕は、彼女にとって監禁されることは幸せではないことのように思えた。誰だって、ずっと同じ部屋に閉じ込められてピアノを弾き続けるだけの生活は嫌だろう。どんなに楽器を演奏することを愛していたとしても、外の空気を味わうことのない生活は、ひどく窮屈に感じるのではないだろうか。

僕は、幾度となく彼女の見たこともない笑顔を思い描いた。遠目でしか見たことのない彼女の顔は、近くで見たらどんなに美しいことだろうか。

あの部屋にいるのを見る限りでは、彼女は一人であってもマスターといっても、笑顔になることはなかった。彼女の笑顔は、あの檻の中から出られれば見ることができるだろうか。いや、そうに違いない。彼女だって、監禁されるのは嫌なはずだ。そう信じて、僕は小部屋に閉じ込められた彼女を見つめ続けた。

演奏が終わってしばらくするまで、マスターはなかなか動こうとしなかった。ようやく目を開けて微笑み、彼女の頬を愛おしげに撫でる。僕は胸がざわつくのを感じたが、ここでマスターに見られてしまっただけが悪いので、ぐっと我慢する。やがてマスターは部屋を出て行き、僕はため息をついた。彼女はそのまま動こうとはせず、しばらくすると日が沈んで、部屋の中の暗闇がゆっくりと濃くなっていった。

いよいよ視界が悪くなっていく頃、部屋に執事が入って来るのが見えた。もうそろそろ彼女の姿も見えにくくなってきたし、執事に見つかるのもまずい。僕は出来る限り音を立てないように木から降りて、小走りで庭を横切った。もうすぐ夕食の時間で、執事は屋敷の隅にある僕の部屋まで食事を運んできてくれる。とっくに仕事は終わっているし、僕が部屋にいなければ不自然に思われるだろう。夕日の影になってすでに暗い北側の勝手口からそっと入って、廊下を見回した。まだ執事がこちらには来ていないことを確認して、自分の部屋まで走った。古びた扉をそっと開けて滑り込み、ランプを灯したところで息をつく。

やがて足音が近づいてきて、ノックの音がした。はい、と僕が言うと、執事がドアを開けて入って来た。食事のお盆には、皿に盛られたシチューとパンが載っていた。「ありがとう」

僕はそう言って盆を受け取り、机に置く。執事は一礼して背を向け、部屋を出て行った。一言も喋らないのも、いつも通りだ。

食事を口に運びながら、やっぱり彼女と直接会って話をしたい、と改めて感じた。このままでは、僕の気持ちは収まりそうにない。覗き見るのではなく、彼女の前に立って、君のことが好きだと言いたい。彼女の笑顔が見たい。

彼女のことを想いながら食べたシチューは、いつもより少し甘いような気がした。

その日はひどく冷え込んで雪が降り、彼女の部屋を見に行く頃には庭木がすっぽりと雪をかぶっていた。目元にかかる粉雪を片手で払いながら、僕は木の葉の間から彼女の部屋の様子を窺う。粉雪が絶え間なく風に揺られて舞っているから、部屋からは僕の姿は見えにくくなるのだが、その代わりに僕も視界が悪くなる。しかも厚着をしているとはいえ、雪に濡れて体が徐々に冷えていくし、僕にとっては生憎の天気だ。

ピアノの傍の肘掛椅子に座るマスターは、窓に背を向けて彼女のピアノに耳を傾けていた。僕だって彼女をもっと近くで見たい。けれど、そのためには彼女がピアノをいったん弾き終わり、マスターが部屋を出て行く必要がある。

彼女にほんの少し会うだけなのに、胸が高鳴る。もう少しで、彼女の傍に行ける。彼女の顔が近くで見られる。彼女に僕の想いを伝えられる。そう思うと、緊張と気持ちの高ぶりで寒さも気にならなかった。

僕は木の枝を掴んだ手に力をこめて、時を待った。

彼女が一曲弾き終えて、部屋からマスターが去っていくのを見届けると、僕は一旦木から降りた。彼女の部屋は二階にあるため、壁の小さな出っ張りを最大限に使って登っていく。作中に念入りに確認したうえで登り方もかなり考えたのだが、やはり

実際に登るのは簡単ではなかった。

何とか彼女の部屋の窓に手をかけ、自分の体を持ち上げる。伸ばした手が窓に当たり、がたり、と大きな音を立てた。同時に片足を踏み外し、滑り落ちそうになる。腕に体重がかかって、思わず僕は呻いた。けれど持ちこたえて、もう一度窓の縁によじ登った。窓に体重をかけてゆすったら、古い窓の鍵がばきりと音を立てて壊れ、僕は肩から部屋の中に転がり落ちた。木の床にあちこちをぶつけてしまったが、顔を上げれば、そこには彼女の姿があった。僕はちょっと情けない姿ながらも、にっこりと笑う。

「やあ、やっと会えた……はじめまして」

さっき床に打ち付けたところが痛んだが、僕はこらえて起き上がる。彼女は驚いたように身をすくめていたが、無理もない反応だ。まずは事情を話さなくては。

「驚かせてごめん。僕は、君に逢いたくて来たんだ」

戸惑ったように、彼女の瞳が揺れる。ここまで来て初めて、彼女の瞳の色が瑠璃色をしていることが分かった。僕はゆっくりと彼女に近づき、屈みこんで視線を合わせる。思ったより彼女は小柄で、精巧で美しい人形のようなようだった。部屋の明かりを反射する滑らかで白い肌は陶器を思わせて、彼女をますます人間離れした容姿にしていた。

その時、唐突に部屋の扉が開いた。僕がはっと顔を上げると、ピアノ越しに無表情な執事の姿が見えた。執事は僕の姿を認めるなり、すっと目を細める。

その表情の変化はごく微細なものだったが、執事の纏う空気が鋭く変わるのを感じた。それと同時に僕は根拠もなく、身の危険を確信した。

僕の頭が一瞬真っ白になってしまった間に、執事はピアノを回り込んでこちらに歩み寄ってきた。その足音に僕ははっとして、反射的に彼女を抱きかかえた。思ったより、彼女の体は軽く華奢で、あるべき重さを感じさせないくらいだった。驚き戸惑うばかりの彼女に何も言葉をかけられないまま、僕は一目散に窓へと向かう。彼女は声も上げず抵抗もせず、ただ目を大きく見開いて僕を見ているだけだった。

さっき入ってきた窓から再び僕は身を乗り出し、ここに来た時とは逆の順序で壁を降りていく。体が恐怖で強張っているのに、なぜ彼女を抱えたまま無事に降りられたのかは分からない。無我夢中で庭を走り、正面の門扉を目指した。この屋敷は背の高い鉄の柵に囲まれていて足がかりもないから、登るのも降りるのも危険が伴う。僕一人ならともかく、彼女を抱えていては恐らく不可能だろう。僕は必死に走りながら、腕の中にいる彼女に問いかけた。

「大丈夫？」

彼女が多分怯えているだろうと思ってかけた言葉だったが、彼女は何も答えず、まだ驚いたような固まった表情のままだった。それも仕方ないことかもしれない、と僕は思い走り続けた。

粉雪はいつの間にか大きさを増して、庭に深々と降り積もっていた。白と灰色だけに彩られた世界を僕は走り抜け、やがて正面の門扉が見えてきた。僕が手入れをした庭木が並んでいるところだ。ここまで来れば、きっと逃げ切れる。僕はほんの少し安心して、再び彼女に語りかけた。

「ごめんね、いきなり連れ出して悪いけれど……これからは、僕が君を守るから心配しないで」

咄嗟に出てきた言葉だったけれど、それが今の僕の決心だ。自分の中でそう確かめて、彼女の顔を覗き込む。宝石のような綺麗な瞳が、ゆっくりと瞬いた。僕は彼女を安心させるように笑いかけて、言葉を続ける。

「きっと君を、幸せにするよ」

自分への誓いを共に、彼女に伝える。雪に閉ざされ静寂に彩られた世界の中で、

「……嫌あああああああああああああああつ！」

金属を軋ませたような音が、冷たい空気を切り裂いた。

「……っ、え」

時が止まったかのような気さえした。

僕はいつの間にか呆然と立ち尽くし、明らかな恐怖に満ちた彼女の瞳を見つめていた。今の音は、間違いなく目の前にいる彼女から発せられたものだとして認識して、頭の真ん中を氷で貫かれたような心地がする。

僕の腕から力が抜けて、彼女の体が雪の上に落ちた。ぼす、という軽い音が雪に吸い込まれる。目を見開いて冷たい雪の上に横たわったまま動かない彼女に、僕は不自然さを感じて戸惑った。

次の瞬間、だん、と破裂音が響き、それとほぼ同時に、背中から左胸に冷たく熱く鋭い痛みが走った。

「……っあ、ぐ」

僕は、衝撃に息さえまなならず、小さく呻く。背中から血が流れ出てくるのが分かった。急に力が抜けて、僕は雪の上にごくりと膝をつく。力を振り絞って後ろを向くと、僕の真後ろに無表情な黒づくめの青年が立っていた。その手に銃が握られているのが、霞みゆく視界の中で妙にはっきりと見えた。

「マス……ター……」

僕は精一杯の憎しみをこめて、その男を睨み返す。男は黒く澄んだ瞳で僕を見た。病的に白い顔からは、何の感情も読み取れない。あいつが、彼女から世界を奪った。僕が、彼女を救わなければ。そう思っても、もう僕の手足は動かない。

はあ、と息を吐く。途端に一気に意識が薄れ、雪の冷たさに体が包まれるのを感じた。

琥珀色の夕陽が差し込む小部屋で、僕はピアノを弾くヴィルを眺めていた。

色白で繊細な十本の指が、その華奢さからは想像もつかない運動性を持って鍵盤の上を踊る。弾き手であるヴィルは、小柄な体に豪華な深紅のドレスを纏って、淑やかそのもののような佇まいをしている。しかし、鍵盤を自在に叩く指先は、しなやかというよりも、人間離れしたすばやさで滑らかさで動いていた。もっとも、何一つ誤ることなく音を奏でることを望んだのは僕だから、人間離れしているのも当然と言えるだろう。

僕はピアノの傍の肘掛椅子に座り、ヴィルは僕の選んだ曲を弾く。それはここで毎日繰り返される光景であり、僕の至福の時間だった。

——僕は、この世に存在する何よりも、音楽を愛している。正確には、音楽の中にある物語を愛している、と言うべきだろうか。

音楽の中には、必ず物語がある。その音楽を書いた人間の愛が、苦悩が、情景が、真っ直ぐに心に届く。言葉よりも音楽の方が、より正確に意思を伝えることができ

ることを実感する。

僕は、音楽を聴いているだけで、僕自身が音楽に溶けていくような感覚すらある。それさえあれば、僕の心は満たされるのだ。他には誰も必要ない。この屋敷には、僕にとって最低限必要なものは揃っている。あとは、僕の世界が壊されないように維持することさえできれば問題ない。

急激な上昇音階が弾き鳴らされて、僕は思考を音色にまた奪われていく。ヴィルは無駄のない動きで、技術的に難しいはずの和音の並びをこなしていた。彼女の創造主である僕でさえ、惚れ惚れとするほどの完璧な演奏だ。僕は目を閉じて、瞼の裏の暗闇を見つめながら音の流れに身を任せる。

やがて、曲の最後の和音が響く。その余韻が消えて、沈黙が完全に部屋を支配するのを待ってから、僕は目を開けた。音はあっという間に消えてしまうのに、その響きは残り香のように僕の体を包み込んでいた。僕は夕陽の弱い光にも眩しさを覚えて、自分を光に慣らすようにゆっくりと顔を上げ、まだ音楽の名残でぼんやりしたまま微笑んだ。

「いい演奏だったね、ヴィル。ありがとう」

先ほどまで流れていた音楽を崩さないように、静かに言う。言葉を持たないヴィルは、返事をする代わりに僕の目をじっと見つめてきた。僕はいつものように、つと指を伸ばして彼女の頬に触れる。変わらず完璧に美しいヴィルを眺め、僕は目を細めてまた笑った。ヴィルのラピスラズリの瞳には、酔いしれたように笑う僕の姿が映り込んでいた。

やがて僕がすつと指を離すと、ヴィルの瞳に名残惜しそうな光がよぎった気がした。本来そのようなことはあり得ないはずだが、彼女と過ごす時間が積み重なるうちに、彼女にも表情のようなものがあるように思えてきた。そんな僕自身に苦笑しながら、彼女に語りかける。

「……分かったから、そんなに見つめないでくれよ。また、明日になったらちゃんと来るから」

言い聞かせるように優しく言って、小さく首を傾げて笑いかける。ヴィルは何も言わないし、ピアノの音色にも表現すべきこと以外の無駄な小細工はしない。だからこそ、ヴィルの奏でる音楽は僕にとって、何にも代えがたいものとなりえるのだ。

いつの間にか陽の光は姿を消して、部屋は薄暗くなってしまっていた。僕は立ち上がって、もう一度ヴィルに言う。

「じゃあ、明日ね」

僕は部屋を出て、外から鍵をかける。明日はどんな音楽を聴かせてもらおうかと考えながら、僕は自室へと向かった。

いつものようにヴィルの部屋に入ってから、ふと窓の外を見る。今日は朝からずっと雪が降っていて、庭の木が真っ白に化粧をしていた。僕は隣のクローゼットから、白い毛糸のレース編みのショールを取り出し、ピアノの前に座っているヴィルの小さな肩にかけてやった。ヴィルが着ている黒いベルベットのドレスの上に羽織ると、繊細なレース編みの模様が映えて可愛らしい。

「今日は寒いね、ヴィル」

僕も自分の着ている黒いジャケットの襟元をかき合わせる。ヴィルは微動だにせず、ただ僕が曲を選ぶのを待っていてくれる。僕は壁際の本棚から楽譜を一冊取りだして開き、ピアノの譜面台に置いた。

ヴィルは譜面を見て、時間をおかずにすつと鍵盤に指を置いた。細かい音符がびっしりと並んだ譜面なのに、よくもこの短時間で読めるものだ。僕はどこまでも完璧に美しいヴィルの演奏を眺め、ふつと白く息を吐いて口元を緩める。ヴィルはいつだって、僕の求めている音楽をくれる。

一部の隙もない演奏が終わると、ヴィルは僕の方を見た。僕はヴィルに柔らかく微笑みかけた。

「素晴らしいね。今日の天気ぴったりだ」

ヴィルは少し間をおいて、窓の外に目をやる。雪に埋もれた外の景色は、まるで色を失ってしまったようだ。けれど、そんな光景も悪くないかもしれない。騒々しく自己主張する色や形の一切を白く閉ざす雪は、僕にとってはとても美しいものに見えた。

ヴィルの部屋を出て、屋敷の中を歩く。僕の部屋は、ヴィルの部屋にほど近い。自室に入った途端、ヴィルの部屋の方向からがたと盛大な音が聞こえてきた。僕は眉を顰めてそちらを向く。もちろん壁があって見えるはずはない。だが、僕の動作に何かを察したのか、どこからともなくずっと執事が進み出た。

無言の問いを投げかける執事に、僕はごく静かな声で言う。

「……行って」

執事は一礼し、足音を一つ小さく立てるとまたどこへともなく消える。ヴィルの部屋のドアが開く音がして、しばらく後に屋敷の外壁に何かが擦れる音が聞こえた。僕はおもむろに部屋を出て正面玄関に向かい、大きな扉を開けた。途端に舞う雪で視界が白く覆われたが、僕は構わず外に出て歩く。

騒音の主はちょうど、南西の棟から駆けてきたところだった。あれは、昔に僕が拾って庭師にした少年だ。彼は僕に気付いていないようで、ヴィルを抱えて何事かを言うのが見えた。

次の瞬間、音ならざる音が、長々と響き渡った。

庭師は驚いたように立ち止まる。何も考えられなくなったように呆けたような表情をしていた。腕が力を失い、ヴィルの小さな体が雪の上に落ちるのが見えた。僕は隠し持っていた短銃を抜きながら歩み寄り、少年の背後に立つ。彼が振り向くより先に、素早く心臓をめがけて撃った。少年は衝撃に一瞬動きを止め、膝をついてゆっくりと振り返った。

「マス……ター……」

少年は憎しみに満ちた目で睨みつけてきたが、僕はその姿を見ても何の感情もわかなかった。ああ、彼も結局浅ましいだけの人間だったのだな、と考えていた。やがて彼の瞳から光が消え失せ、崩れるように倒れ伏した。

「大丈夫かい、ヴィル」

僕は倒れた庭師の体を迂回し、雪の上に横たわっていたヴィルに声をかけた。彼女をそっと抱き上げると、彼女のラピスラズリの瞳と目が合った。言葉も感情も持たない彼女だが、僕が彼女の小さな手を握り返すと、彼女は瞳を和ませたように見えた。それを認め、僕はふ、と自分の口元が笑うのを感じる。彼女の頭や肩を撫でて雪を落とし、静かに話しかけた。

「ごめんよ、気づくのが遅くなって」

僕は彼女の瞳を見つめてもう一度微笑みかける。足元にある庭師の屍には目もくれず、少女の小さな体を優しく抱きしめた。腕の中に感じる彼女は、雪のせいかすっかり冷えてしまっていた。

彼女の衣装などに返り血が飛んでいないか入念に確認しながら、僕は屋敷の中へと戻る。庭師が彼女を連れ出そうとするなんて、身の程知らずもいいところだ。僕はふと、彼が屋敷の前に行き倒れていた時の、純粋な生への執着しかなかった瞳を思い出す。いっそ潔いまでに生きることしがみついた彼の目が面白いと思って、気まぐれに拾ってやった。けれど、彼も所詮はただの人間だった。僕が僕自身の世界のために作り出したヴィルに手を出すなど、最初から可能なはずがなかったのだ。

雑音をかき消すように、静かに降り積もっていく雪の中、僕は彼女の奏でる音楽を想う。純然たる楽音で構成された、どこまでも美しい世界。そこには、雑音を持ち込むだけの人間など必要ない。僕の世界をかき乱す者がいれば、排除すればいいだけのことだ。僕はヴィルに、囁くように語りかける。

「さあ、部屋に戻ろうか」

白と灰色の雪景色に、一点だけ鮮やかな赤が見える。その光景は美しかったけれど、私にとっては彼の腕の温もりの方が遥かに大切だった。

——貴方のお傍にいられば、それでいいのです。

それが私の心そのもの。私の全て。音楽しか愛せない彼にとって、私は音楽を奏でる手段でしかない。

それでも、私が音楽を奏でることで、手段としてでも彼の傍にいられるならば、満足なのだ。そのためになら、何を引き替えにしてでもいい。たとえ悪魔に魂を売り渡してでも、私は彼の傍にいたい。

屋敷に入る直前、無表情な執事が屍を片付けているのが彼の肩越しにちらりと見えた。あの少年は、私をあ部屋から出そうとした。私を彼——私にとっての唯一であり絶対であるマスターから遠ざけようとした。私が望むのは、彼の存在のみ。それ以外は何も要らない。この身の自由すらも、私は望まないのだから。

あの少年は身勝手なだけの、ただの人間だったのだ。何が目的だったのか今となっては知りようがないが、彼の勝手な行動のせいで、私がひどく恐ろしい思いをしたことには変わりがない。けれどマスターの腕の中に抱かれている今は、少年のことなど些末な存在にしか思えなかった。

私の幸せは、マスターとともに在ることなのだ。マスターが音楽を求める限り、音楽を奏でるための存在である私は、愛しいマスターの傍にいられるのだから。

一種の恍惚とした感覚に浸りながら、私は彼の腕の中に身を任せた。

[戻る](#)